

新 5 千円札の人「津田梅子」

2023 年 3 月 1 日

我部山民樹

1. はじめに

周知のように 2024 年に新しくなる日本銀行券の 5,000 円札の図柄に選ばれたのは津田梅子（つだうめこ）だ。梅子は津田塾大学を創立した女性として知られているが、彼女はどのような人生を歩み、なぜ津田塾大学を創立しようと考えたのだろうか。

35 歳のころ(?)



7 歳のころ



プリンマー大学在学中



梅子は幕末の 1864 年（元治元年）、東京の御徒町で誕生した。当初の名前は「むめ（うめ）、後に梅子と改名」という。明治時代に日本人女性としてはじめての海外留学生となり、帰国後は津田塾大学の前身となる女子英学塾を開いて、女性の教育に尽くした。

梅子の人生は、父親・津田仙（つだせん）によって大きく舵を切られた。満で 6 才のときに「岩倉使節団」の一員として親元を離れ渡米。以後 11 年間、アメリカの家庭で育った。

仙は先進的な考え方の持ち主で、佐倉藩士（現千葉県佐倉市）の家庭で育ち、17～18 歳で江戸幕府に出仕。蘭学塾に入門。森山栄之助（*1）に英語を学ぶ。23～24 歳で外国奉行の通訳となる。後に外国奉行の通訳として幕府に仕えた。そして 1867 年に仙自身が福沢諭吉らと共に幕府の遣米使節の通訳として渡米したが、そのときにアメリカの女性の教育レベルの高さや地位の高さを目の当たりにし、女子教育の重要性を認識していた。

北海道開拓次官の黒田清隆が 1871 年 1～5 月にアメリカを訪問したとき、男女平等・女子教育の必要性を実感し、正院（太政官の最高意思決定機関）に伺い出て実現させた開拓使による女子留学生のアメリカ派遣事業に、仙は梅子を応募させた。

1871 年 12 月、女子留学生は梅子を含む 5 名が応募し、その全員が政府の派遣する岩倉使節団（*2）に随行した。

*1. 森山栄之助

江戸後期の 1848 年、アメリカ人のマクドナルドが密入国して利尻島（北海道）で捕まり、長崎に送致された。座敷牢（ろう）に幽閉され、その格子越しに森山栄之助ら 14 人の通詞に英会話を教えた。**国内初の英語を母語とする外国人教師だ。**その頃は既に英米の船が日本の近海に続々と姿を現していた。**生きた英語を身に付けた森山は江戸幕府に重用され、幕末にすさまじい働きを見せる。**米国のペリー、ロシアのプチャーチンらの来航時に通訳を務め、武力の差を背景に開国を迫る欧米列強と意思疎通を図り、通商条約を結んで平和的な開国を実現した陰の立役者となった。マクドナルドは温厚篤実で日本人に好意的だった。国や文化が違っても同じ人間同士、きっと心は通じ合うー。森山は英語だけでなく、最も大切な心得を師から学んだのだろう。明治維新後、森山は燃え尽きたように 51 歳で急逝した。異文化とのコミュニケーションに一身をささげた、誠に長崎人らしい生涯だった。（長崎新聞）

*2. 岩倉使節団

明治維新期の 1871 年 12 月 23 日から 1873 年 9 月 12 日までアメリカ合衆国やヨーロッパ諸国に派遣された使節団である。岩倉具視を全権とし、政府首脳陣や留学生を含む総勢 107 名で構成された。

2. 主な出来事

梅子の名前で統一する。

年度	主な出来事
1837 年	津田仙（つだせん、津田梅子の父親）下総（現千葉県）佐倉藩の小島良親の三男として生まれる
1855 年	仙、江戸幕府に出仕。蘭学塾入門。森山栄之助（蘭・英 2 カ国語を使いこなせる通詞として活躍）に英語を学ぶ
1861 年	・仙、外国奉行の通詞（通訳）となる ・津田梅子、生まれる（父；仙、母；初子）
1867 年	仙、江戸幕府の軍艦受取委員会随員として、コロラド号で渡米。福沢諭吉も同乗。
1869 年	仙、幕府崩壊し官職を辞す。

1871 年	仙、北海道開拓使の嘱託になる。女子教育に関心のあった開拓次官・黒田清隆が、岩倉使節団に女子留学生を随同行させることを企画したのを知り、娘・津田梅子を応募する。 ・12月、6歳の梅子、岩倉使節団に随同行し渡米する。日本弁務使館の書記官で画家のチャールズ・ランマン夫妻の家に預けられる。
1872 年	女子留学生5名(*3)のうち、年長の2名が帰国。残った山川捨松、永井繁子と梅子は生涯の友となる
1873 年	・「コレジエト・インスティテュート」卒業。私立学校「アーチャー・インスティテュート」進学
1881 年	・梅子、開拓使より帰国命令が出たが、山川捨松と共に、卒業までの延長を申請し、認められる。永井繁子はヴァッサー大学音楽科を卒業したので帰国
1882 年	・7月に梅子、帰国 ・12月、永井繁子、瓜生外吉と結婚(*4)
1883 年 18 歳	・梅子、外務卿・伊藤博文の邸で開かれた夜会に招待され、伊藤博文と再会。華族子女を対象に教育を行う私塾「桃夭女塾（とうようじょじゅく）」を開設した下田歌子(*5.)を紹介される。 ・梅子、伊藤博文に雇われ、伊藤家に滞在し、英語指導や通訳にあたる。 ・梅子、下田歌子より日本語を学ぶ。「桃夭女塾（とうようじょじゅく）」の英語教師になる。
1885 年 20 歳	・梅子、伊藤博文の推薦により、「家族女学校」の英語教師になる。 ・梅子、縁談を断る ランマン夫人と上野榮三郎（梅子の姉である琴子の夫）は、海軍士官の世良田亮（繁子の夫・瓜生外吉のアナポリス海軍兵学校時代の同期生）に会って好印象を持ち、繁子がアメリカで出会った外吉と幸せな結婚生活を送っていることから、世良田は梅子の配偶者にふさわしい、と考え、二人の結婚を再三勧めたようだ。 しかし梅子は世良田との縁談を断り、ランマン夫人への手紙に「どうぞセラタ氏のことはもう書かないで下さい。「もうこの話題は終りにしたい。私がもう一度掘り起こしたいと思うのでなければ、これが最後です。」と書いた。

1886 年 21 歳	・梅子、女学校の職制変更に伴い嘱託になる。華族の上流階級的気風には馴染めず。
1888 年 23～24 歳	・ふたたび留学 留学時代の友人アリス・ベーコンが来日。留学を薦められ、再度の留学を決意。フィラデルフィアのモリス夫人に手紙で留学について相談すると、モリス夫人は、懇意にしているプリンマー大学 ジェームス・E・ローズ学長に梅子の受け入れを要請し、ローズ学長はそれを即諾すると共に、梅子に対する「授業料の免除」と「寄宿舍の無償提供」を約束した。また、「華族女学校」校長の西村茂樹は、梅子に同校教授としての規定通りの俸給を受けながらのアメリカ留学（2 年間）を許可した。 ・捨松、結婚（*6）
1889 年 24 歳	・ふたたび渡米。「プリンマー・カレッジ」で生物学専攻。使命であった教授法に関する研究は州立「オズウィゴ師範学校」で学ぶ。
1891 年 26～27 歳	・留学 3 年目の 1891 年から 1892 年の冬に、梅子は「蛙の発生」に関する顕著な研究成果を挙げた。ローズ学長による、プリンマー大学理事会への 1891 年度報告書は「ミス・ツダの蛙の卵の軸の定位に関する研究は、その優秀性のゆえに、特に言及しておかねばならない。」（原文は英語、亀田帛子による和訳）と特記している。そして梅子の研究成果は、指導教官であるトーマス・ハント・モーガン博士（1933 年 ノーベル生理学・医学賞）により、博士と梅子の 2 名を共同執筆者とする論文「蛙の卵の定位」（"The Orientation of the Frog's Egg"）にまとめられ、1894 年にイギリスの学術雑誌 <i>Quarterly Journal of Microscopic Science</i>, 35. に掲載された。梅子は、欧米の学術雑誌に論文が掲載された最初の日本人女性である。モーガン博士は、帰国した梅子宛の手紙（1893 年 10 月 14 日付）において「私たちはあなたにすぐにアメリカに戻って欲しいといつも願っています。」（原文は英語、亀田帛子による和訳、）と、科学者としての梅子を高く評価する言葉を記している。
1892 年 27 歳	・梅子、帰国。ふたたび、「華族女学校」に勤める。
1894 年 29～30 歳	・「明治女学院」でも講師に。

1898 年 33～34 歳	・「女子高等師範学校」（お茶の水女子大の前身）の教授を兼任。
1900 年 35 歳	・「日本女子大学校」創設運動や、高等女学校令・市立学校令交付など女子教育への機運の高まりを背景に、官職を辞す ・父・津田仙やアリス・ベーコン、大山捨松、瓜生繁子、桜井彦一郎らの協力を得て、「女子英学塾」（津田塾大学の前身）を創設し、塾長に就任。華族へ平民の区別のない女子教育を志向、一般女子の教育を始める。それまでの行儀作法の延長としての女子教育と異なり、 進歩的で自由な、レベルの高い授業 が評判となる。独自の教育方針を妨害されないことを貫き通すため、資金援助は極めて小規模に。学生や教師の増加、拡張のための土地・建物の購入費など、 経営は厳しかった 。
1902 年 37～38 歳	・名前を漢字に改め、 梅子 にする。
1903 年	・新築落成した東京市麹町区五番町（現：東京都千代田区一番町）の恒久的な校舎に移った。前年夏の東京市麹町区五番町の土地建物購入時の代価は1万円で、 ボストンのウッズ夫人（Mrs. Henry Woods）から寄せられた大口の寄付金で大部分が賄われた 。 ・専門学校令に基づき、「女子英学塾」を社団法人に。
1917 年 52 歳	・ 梅子 、春ごろ体調を崩して入院する。2か月後に退院したもの、その後も入院と退院を繰り返した。
1919 年 54 歳	・梅子、「女子英学塾」の経営基盤も整い、体調を考慮して 塾長辞職 。鎌倉の別荘で長期闘病に入る。
1923 年 58 歳	・関東大震災で校舎全焼。翌年復興仮校舎建設
1929 年 64 歳	・ 梅子 、 死去 。会葬者は約1千人に上り、昭和天皇と皇后から祭祀金一封が下賜された。
1948 年	・「津田英学塾」、「津田塾専門学校」への改称を経て、戦後に「 津田塾大学 」となった。

*3. 女子留学生

応募したのは5名で、その全員が随行した。

・上田悌子（幕臣・上田峻の娘、満14歳）

- ・吉益亮子（幕臣・吉益正雄の娘、満 14 歳）
- ・山川捨松（会津藩家老・山川浩の妹、満 11 歳、後に大山捨松）
- ・永井繁子（幕臣・永井玄栄の養女、かつ幕臣・益田孝の実妹、満 8 歳、後に瓜生繁子）
- ・津田梅子（満 6 歳）

5 人の女子留学生のうち、すでに思春期を過ぎていた年長の 2 人は病気を理由にその年のうちには帰国してしまった。逆に年少の捨松、永井繁子、津田梅子の 3 人は異文化での暮らしにも無理なく順応していった。この 3 人は後々までも親友として、また盟友として交流を続け、日本の女子教育の発展に寄与していくことになる。



左から、永井繁子、上田梯子、吉益亮子、津田梅子、山川捨松

*4. 永井繁子、結婚

名家であるアボット家に寄宿し、その後の 10 年間をアメリカで過ごすこととなる。

アボット家は繁子を家族同様に慈しみ、同家の未婚の娘であるミス・エレン・アボット（繁子が預けられた当時は 30 代半ば¹。繁子は「ネリーおばさんと終生慕った。）が母親代わりとなった。

15 歳になった 1876 年、後に結婚する瓜生外吉（当時は 19 歳。既に熱心なクリスチャンであった。繁子が寄宿するアボット家と親しいコネチカット州ニューヘブンのピットマン家に寄宿して、アナポリス海軍兵学校への進学を目

指していた。)と知り合って恋仲となった。二人は、1881年に帰国する時点では、既に婚約していた。

学内コンサートに何度も出演してピアノ演奏や声楽歌唱を披露し、好評を博した。日本最初のピアニストと言われている。

女子留学生は帰国するも、日本語が不慣れな上に、儒学の価値観が色濃く残る日本においては、女子留学生が活躍できる場は乏しかった。

ヴァッサー大学音楽科に在学時の繁子



下田歌子



*5. 下田歌子

日本の明治から大正期にかけて活躍した教育者、歌人。女子教育の先覚者で、生涯を女子教育の振興にささげ、実践女子学園の基礎も築いた。自宅で『桃夭女塾（とうようじょじゅく）』を開講。当時の政府高官の殆どがかつての勤王の志士だったため、彼らの妻の多くは芸妓や酌婦だった。世間知らずではないが、正統な学問のない彼女らに古典の講義や作歌を教えた。

*6. 山川捨松の結婚

ヴァッサー大学留学中



帰国報告で参内



鹿鳴館時代



捨松はすでにアメリカに渡っていた兄の山川健次郎の知人の仲介で、コネチカット州ニューヘブンの会衆派の牧師レナード・ベーコン宅に寄宿し、そこで4年近くを一家の娘同様に過ごして英語を習得した。健次郎はアメリカに馴染みすぎると恐れ、日本語も欠かさず勉強するように命じたが、捨松はこれが最も難しかったと回想している。また当時、健次郎はキリスト教を嫌っており、礼拝に出ることはかろうじて許可したものの、入信させないように依頼したが、捨松はベーコン牧師より1876年にキリスト教の洗礼を受ける。

このベーコン家の14人兄妹の末娘が、捨松の生涯の親友の一人となるアリス・ベーコンである。捨松はその後、地元ニューヘブンのヒルハウス高校を経て、永井繁子とともにニューヨーク州ポキプシーにあるジーン・ウェブスターやエドナ・ミレイなど、アメリカを代表する女性知識人を輩出したヴァッサー大学に進んだ。繁子が専門科である音楽学校を選んだのに対し、この頃までに英語をほぼ完璧に習得していた捨松は通常科大学に入学した。

当時のヴァッサー大学は全寮制の女子大学であった。東洋人の留学生などはただでさえ珍しい時代、「サムライの娘」（会津藩家老の娘）スティマツは、すぐに学内の人気者となった。捨松は英文学を専攻し、たびたび学内誌に寄稿するなど、成績はいたって優秀だった。2年生のときには学級委員長となり、創立記念日には着物を着て実行委員長を務めている。得意科目は生物学だったが、官費留学生としての強い自覚を持っていたようで、日本が置かれた国際情勢や内政上の課題にも明るかった。シェイクスピア研究会やフィラレシーズ会にも入会している。

1881年には、この年に廃止される開拓使より、10年の留学期間が満了することによる帰国命令が出たが、後1年で学士号を取得できる見通しの捨松、後1年で高校卒業資格を取得できる見通しの津田梅子は1年間の延長を要請し、認められた。開拓使の命令に従って1882年10月に帰国した。

恋愛結婚

捨松は・陸軍中将・陸軍卿・参議となっていた大山巖との結婚を決意した。この頃アリスに書いた手紙には捨松は、「いろいろ考えた末結婚することになります。私がつける仕事はなさそうだし、それならば彼と結婚してその立場から女性のためになにかできるのではと思うのですが（後略）」「たとえどんなに家族から反対されても、私は彼と結婚するつもりです」と記している。

「鹿鳴館の花」と呼ばれるほどに鹿鳴館で貢献し、後に**慈善活動**で活躍する。

旧友の再会



左から梅子、アリス・ベーコン、繁子、捨松

3. 梅子の足跡

①津田梅子の生い立ち

梅子の人生は、父の仙によって大きく舵をきられます。6才のときに「岩倉使節団」の一員として親元を離れ渡米。以後11年間、アメリカの家庭で育った。

6才といえば現代なら小学校1年生。ピカピカのランドセルを背負っている1年生を一人で海外に留学させることはちょっと想像ができないでしょう。

梅子がアメリカに渡ったのは1871年（明治4年）。1871年といえば郵便制度が開始された年。ようやく国内での手紙のやりとりが便利になったという時代に、6歳の幼児が親と別れてアメリカに行く心細さは計り知れない。

梅子を岩倉使節団に入れようと考えたのは、父親の仙だった。

1871年、黒田清隆が、アメリカ合衆国とヨーロッパ諸国を旅行した。その時、アメリカ合衆国の女性の教育レベルや地位の高さに驚いたそうで、黒田が帰国後、**女子教育の重要性と留学生派遣を政府に説き、認められ**ことにより、**女子留学生のアメリカ派遣が実現した。**

②津田梅子はなぜ岩倉使節団に参加した？

岩倉使節団の目的は、政府首脳による不平等条約の改正交渉、官僚や留学生による欧米諸国の制度や技術の調査にあった。

伊藤博文や木戸孝允、大久保利通といった政府の首脳も同行している。

梅子は「開拓使派遣留学生」の一員として10年間ものアメリカ滞在を計画していた。他の男子学生が2年で帰国しているなか、女子学生だけ10年も滞在した背景には、北海道の開拓を行っていた黒田清隆（後の内閣総理大臣）による尽力があったからだと言われている。

女子留学生の留学費用は、政府ではなく黒田の北海道開拓使から支払われている。当時、仙が北海道開拓使で働いていたため、黒田の女子留学生派遣計画の情報はすぐさまキャッチできていたと考えられる。

③アメリカでの暮らし

当時、日本からアメリカに渡る交通手段は船のみ。梅子は「蒸気船アメリカ号」で約1ヶ月かけてサンフランシスコに到着した。

それからワシントン近郊、ジョージタウンの「ランマン夫妻」の家で暮らすことになった。英語を流ちょうには話せない6歳の梅子はどんなに心細かったことでしょう。

ところが留学から2年後の1873年、キリスト教の洗礼を受けたいと夫妻に打ち明けるほど、アメリカの暮らしに馴染んでいた。

梅子は、フィラデルフィア近郊の教会で洗礼を受けたあと、初等教育を終え、8歳からは私立の女学校でフランス語やラテン語を学ぶ。

④アメリカからの帰国と帰国後の苦悩

梅子の留学期間は1881年までのはずだったが、本人の希望で1年間延長される。そして翌年の7月、17歳になった梅子が帰国。

明治15年（1882年）の日本といえば、ようやく日本銀行券が発行されたころ。女性の社会進出どころか、内閣制度がスタートするなど、近代国家としての基盤作りの段階にあった。

11年間もアメリカで暮らし、英語が堪能でも日本語が不自由な梅子に居場所はない。男子留学生に職は与えられても、梅子には政府や開拓使から仕事を与えられることはなかった。

帰国後にランマン夫人に送った手紙によると、梅子は自分のことを「移植された木」と表現している。居心地の悪さを感じていたのだろう。

また国費で留学をしていたことから、国に恩返しをしなければならないとの義務感にも疲れていたようだ。

また梅子は、**アメリカの女性と日本の女性の地位の差にも驚いた**。当時の日本人女性は、高等教育を受けることはできなかった。

梅子と一緒に留学した女子留学生の二人は、早々に結婚。のちに、梅子も何度か縁談をすすめられたが、「話を聞くだけでもうんざりです。」と断って一生結婚をしないと誓ったそう。

⑤華族女学校での教鞭と再留学

梅子は伊藤博文の家の家庭教師を経て、1885年（明治18年）に「華族女学校」の英語教師に就任する。

華族女学校（のちの学習院女子大学）は華族の女子に本格的な学びを提供する場所。梅子は華族女学院で女子学生に英語を教えながらも、ふたたびアメリカへ留学することを夢見る。

ただ、当時は6歳のころとは異なり、日本でも留学制度がしっかりと定められるようになり、男子学生であっても簡単には留学できない時代になっていた。

女性の梅子が留学することは非常に困難だったが、留学時代のアメリカの友人の助力により、授業料の免除等を勝ち取って、華族女学校に在籍したまま渡米することが認められる。

期限は2年間。梅子が再度アメリカに渡るのは1889年、24才のことだった。アメリカに渡った梅子はプリンマー大学に入学する。大学で質の高い教育を受けて、女性にとっての教育の重要性を再認識した。

当時の梅子が学んでいたのは生物学だった。1894年には梅子が執筆した「蛙の卵の発生について」の論文が学術雑誌に掲載されている。

また、人に物事を教える「教授法」についてはオゴウィゴー師範学校で学んだ。

⑥女性教育への思い、女子英学塾の創設

プリンマー大学在学中、梅子は「日本婦人米国奨学金制度」を設立した。自分のように学びたい女性の助けになればと考えた。

資金集めのための公園や募金活動を行い、2度目の留学から帰国したのは1892年（明治25年）のこと。ふたたび華族女学校に勤め、明治女学院でも教壇に立つ。

その後も二回、アメリカやイギリスに留学して、「女性の地位向上のためには専門的な知識、学問が必要不可欠である」との強い思いを強くする。

そして1900年（明治33年）、「女子英学塾」を創設。これまでのお行儀作法の延長のような学校ではなく、少人数方式のレベルが高い教育を目指した学校を。

初年度の入学者は日本全国から集まった10名の女性。女性たちは英語を学び、英語教師を目指す。ここから日本人女性活躍の第一歩が踏み出されたといってもよいでしょう。

⑦津田梅子の残した功績と名言エピソード【教え】

女性の地位の向上、女性の自立を追求し続けた梅子。彼女が残した津田塾大学は今なおその理念を受け継ぎ、「英語教育」「少人数教育」「留学・国際交流」の三つの理念を掲げている。

梅子は女子英学塾をひらいたときの挨拶で、「オールラウンドウィメン（all round women）」という言葉を残した。

女子英学塾は英語を学ぶ学校でしたが、英語の習得のみならず視野を広い女性であるようにとの思いが込められた言葉だ。

オールラウンドウィメンは、当時の女子学生に贈られた言葉だった。しかし、梅子ら先人の努力の甲斐あって、現代には男女が対等に力を発揮できる社会が実現されている。今や、すべての子どもたちに向けられた言葉と言えるだろう。

視野を広く持って学ぶこと。そして一人の人間として自立して生きること。

苦労と困惑を繰り返しながら、女性の地位向上のために奮闘した梅子が人生を通じて表現したことは、将来のために何をすべきかと考えるとき、きっと役に立つはである。

⑧津田塾大学の発祥の地に行ってみよう

梅子が女子英学塾を開校したのは、千代田区一番町。現在は商業ビルが建築されており、当時の姿をしのぶことはできない。

津田塾大学発祥の地であることがわかるように、銀色のプレートが掲示されている。

周辺には皇居や駐日英国大使館、国会図書館などが点在しており、そぞろ歩きするのにぴったり。梅子の人生に思いをはせながら、歴史の重みをかみしめて歩いてみるとよいでしょう。

○梅子の墓所

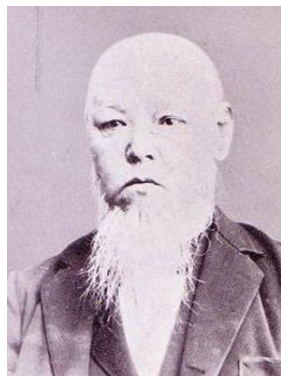
梅子は遺言で「自分の墓は小平の新校地に」と残していました。本来、校地内に墓を作るのは困難とされており、青山墓地に仮埋葬されました。しかし、津田梅

子に限ると言うことで東京府の許可を得て小平キャンパス内の北東部に墓所が造られ、1992年9月30日に墓地落成、10月8日に改葬式が行われました。



4. 父親・津田 仙（つだ せん）

津田仙は、満6歳の娘・梅子を岩倉使節団（1871～1873年）の留学生募集に応募し、渡米させたことが、その後の梅子の人生を決定づけたと言える。仙は最初、琴子を留学させるつもりだったが、琴子に断られた。その後、梅子に打診し、梅子が自分の意志でアメリカに行きたいと言ったので、梅子を応募したとされる。



津田仙（1837年8月6日～1908年4月24日）は、日本の農学者、キリスト者。学農社創立者。青山大学・筑波大学付属盲学校・普連土（ふれんど）女学

校の創立に関わる。また、日本で最初に通信販売を行った人物でもある。同志社大学の創始者新島襄、人間の自由と平等を説いた東京帝国大学教授の中村正直とともに、**キリスト教界の三傑**とうたわれた。明六社（1873 年（に結成された当代一流の洋学者たちによるわが国最初の学術結社。）会員となる。

娘に上野琴子、津田梅子、余奈子（アメリカに移住し、日本語新聞『日米新聞』を発行しサンフランシスコの日系人社会のリーダー的存在だった安孫子久太郎と結婚）などがいる。

○父親・津田仙の生涯

年 度	主な出来事
1837 年	・ 8 月 6 日、下総国佐倉藩佐倉城内に堀田氏家臣・小島良親の三男として生まれる。幼名、千弥。
1851 年	・ 元服、桜井家の養子となる
1855 年	・ 江戸幕府に出仕。蘭学塾入門。森山栄之助に英語を学ぶ。
1861 年	・ 外国奉行の通訳となる
1867 年 30 歳	・ 江戸幕府の軍艦受取委員会随員（通訳）として、コロラド号で渡米。福沢諭吉、尺振八が同船。ニューヨーク、フィラデルフィア、ワシントン D.C を訪れる。
1869 年 31～32 歳	・ 幕府崩壊し官職を辞す ・ 築地の洋風旅館、築地ホテル館に勤め、西洋野菜の栽培などを手がける。
1873 年 35～36 歳	・ ウィーンバンコク博覧会の副総裁・佐野常民（政治家で日本赤十字社の創始者。枢密院顧問官、農商務大臣、大蔵卿、元老院議長）の書記官として随行

1874 年	・帰国後オランダ人農学者ダニエル・ホイブレイクの指導を受け、『農業三事』出版。
1875 年	・米国メソジスト監督派教会にて、ジュリアス・ソーパー宣教師よりメソジスト派信者として妻・初と共に洗礼を受ける ・ウイーン万博から持ち帰ったニセアカシアの種子が、大手町に植えられる。東京の街路樹となる。現在の街路樹はエンジュである。
1876 年 38～39 歳	・東京麻布にて、農産物の栽培・販売・輸入、農産についての書籍・雑誌の出版など手掛ける「学農社」を設立。その一環として、『学農社農学校』を創立。キリスト教指導も行う。 ・学農社雑誌局発行の『農業雑誌』で、アメリカ産トウモロコシの種の通信販売を始める。これが、日本で最初の通信販売と言われる。 ・栗原信近（甲斐（かい）穴山村(山梨県韮崎(にらさき)市)の名主。維新後は区長, 区長総代理をつとめる。興益社(のちの第十国立銀行), 富士川運輸, 農産社などを設立し, 地域の発展につくす。)に招かれ、ワイン醸造技術指導のため甲府を訪れる
1883 年	第三回全国基督教信徒大親睦会の幹部に就任
1890 年 52～53 歳	東北を視察、リンゴ二十数種を東京に持ち帰る。当時珍しかったマスコミ向けの試食会を開催。 ・足尾鉍毒事件、田中正造を助け、農民運動に奔走する。
1897 年	・事業を引退し、鎌倉で過ごす。
1908 年	・死去。享年 70 歳。新島襄、中村正直と共に、「キリスト教界の三傑」と称される。

○津田仙の足跡

【（青山学院史より）

津田仙が、実は青山学院の創設に大きく関わった人物であることをご紹介したいと思います。

明治期日本を作った「大平民」

氣賀健生青山学院大学名誉教授（故人）が記した書籍『青山学院の歴史を支えた人々』には 37 人の人物が紹介されており、その中で 3 番目の人物として津田仙を取りあげています。

『津田仙の名を知る人は少ない。（中略）しかし彼の生きた明治期には、官界から外交、実業、農業畑、教育、宗教界から社会事業界に至るまで、津田仙の名は広く知られていたのです。（中略）彼は生涯その身を飾る何の称号をももたなかった。ごく若い時代を除いて終生在野の「平民」であった。しかし、豪放磊落にして義侠肌、直情径行にして天真爛漫、その行動力は群を抜き、巨軀をひっさげたその姿は至るところに見られ、情が深く涙もろく、畏敬をもって人に頼られる「大平民」であった。』と紹介しています。

氣賀名誉教授の同著書より要約してみます。

『津田仙は、佐倉藩士の子として 1837 年に誕生。蘭学・英学に没頭し、1861 年幕府の外国方奉行通弁役として仕官、1867 年には幕府の遣米使節の通訳として渡米。アメリカで、男女平等と農業重視の世界を目の当たりにし、この経験が後の仙を形作ったと言えよう。

帰国後、明治政府が作った「築地ホテル」の理事や、北海道開拓使の嘱託、青山の開拓使農事試験場で農事研究に携わり、西洋野菜の栽培を手掛けるなど、日本に於ける近代農業の先駆者として活躍した。

（広報部注：この農事試験場は、まさに「国産ビール開発にかけた情熱」でご紹介した農事試験場でした）

また、明治初期のキリスト教主義学校の創立に数多く携わっている。その中でも中心的に関わった学校は、同志社、普連土女学校、東京盲啞学校、そして青山学院である。新島襄と親しく、仙の長男の元親は同志社に学んでいる。普連土女学校の開校時の仮校舎は、仙の自宅内に建てられた。

キリスト教界においても足跡を残しており、1878年に開催された第1回全国基督教徒大親睦会という明治期のキリスト教史上重要なイベントにおいて議長を務めている。

青山学院の創立にも深く関わった。梅子が渡米した際に寄宿した先がチャールズ・ランメンという人物で、その友人であったジュリアス・ソーパーが、アメリカのメソジスト監督教会が日本に派遣する宣教師5人の内の一人として日本に来る際、梅子の父親を手掛かりにしたことがきっかけであった。

ソーパーの影響を受け、仙は受洗し、キリスト教徒となる。仙はソーパーを助け、1878年4月16日、東京築地に「耕教学舎」を設立。青山学院の源流となる三つの学校のうちの一つを創設した。その後、ほかの学校と交わり、初期の青山学院を形成していくが、その基礎作りには、仙が中心的役割を果たしていた。』

また、明治初期の頃の啓蒙的思想集団「明六社」（1873年に結成された当代一流の洋学者たちによるわが国最初の学術結社。）にも名を連ねています。福沢諭吉、西周らは有名ですが、津田仙の名前はあまり後世に耳にしません。

さらに、足尾銅山鉍毒事件においても、田中正造を助け、八面六臂の活躍をした、と気賀名誉教授は記しています。

青山学院の源流となる三つの学校のうちの一つ「女子小学校」をドーラ・E・スクーンメーカーが創設した際、教室として津田家の隣の岡田邸を斡旋、その岡田邸売却後は、一時津田家の客間を貸しています。「女子小学校」とはいうものの、仙の息子二人も入学させ、スクーンメーカーを大いに助けています。

このように津田仙は、青山学院の創設時に深く関わったのみならず、明治の偉人たちとともに、教育、農業・農民、キリスト教をキーワードとした分野を中心に、開国後の日本の道標として、名は知られない「大平民」として、サーバント・リーダーとして活躍された偉大な先人であったことがわかります。

津田仙は、1908年4月24日、東海道線の汽車の中にて脳溢血で倒れ、帰らぬ人となりました。4月28日に、青山学院講堂において葬儀が営まれました。

青山霊園に眠るその墓碑には次の聖句が刻まれています。

「我を信ずる者は死ぬとも生きん」（ヨハネ傳福音書 11 章 25 節）】

5. 堀田正睦（ほったまさよし）



津田仙という人物は、老中首座として幕政を主導した佐倉藩主・堀田正睦（ほったまさよし）の存在があって、大平民として在野で大活躍できたし、娘・梅

子の運命の舵を大きく切ることができたと言える。正睦は蘭癖（蘭学に傾注したり、オランダ式（或は西洋式）の習俗を憧憬・模倣したりするような人を指した呼び名である。）と称されたほどであり、蘭学に注力し、幕末と明治期に有為の人材を育成した。蘭学に関して、西の長崎、東の佐倉と称されたほどだ。また正睦は蘭方医・佐藤泰然を招聘して、蘭医学塾及び診療所として「佐倉順天堂（順天堂大学の前身）を開かせ、藩をあげて開化政策に取り組んだ。

ちなみに佐倉藩は老中 8 名を輩出している。その一人が佐倉藩第 5 代当主・堀田正睦である。

佐倉順天堂記念館



参考資料

- ・鎌田正男氏；「房総地理歴史散歩」の「佐倉藩と新札の人 津田梅子」（八幡公民館主催）
 - ・ウィキペディア
 - ・青山学院史
 - ・青山学院大学名誉教授・気賀健正氏の著書
- 以上